

第43回 大阪府学校教育審議会（概要）

日 時：令和3年12月22日（水）午前10時00分～午前11時40分

場 所：ホテルアウエーナ大阪 金剛

出席委員：浅野良一会長、小田浩伸会長代理、田村知子委員、沼守誠也委員、小酒井正和委員（オンライン出席）、黒田隆之委員、小原美紀委員（オンライン出席）、山崎智恵子委員

審議内容等：答申のとりまとめに向けて（答申成案の検討）

質疑等

浅野会長：

それでは、今の事務局からの説明を踏まえて、ご意見や、不明な点、なければご感想をいただきたい。名簿順に田村委員から願います。

田村委員：

まず2ページだが、社会全体で大阪の教育を支えるということが新たに書かれており、大変よいことだと思う。国の方向性としても、社会に開かれた教育課程や、社会総がかりで子どもたちを支えるといったことがあり、こども家庭庁の創設にも動いているので、社会全体で子どもたちを支え育てていくということが、強調されているのはいいと思うし、もっと強調されてもいいかと思う。

それから、9ページ、27ページに関して、教員の若年層化に対して、それ自体は悪いことではないと思うが、課題はある。ノウハウの引き継ぎが大事だということが27ページに書いてある。それとともに、リーダーシップやリーダー層の早期の育成が課題としてあると考えている。ぜひ、大阪教育大学も活用いただけたら。

11ページの表5だが、回答者が若干わかりにくいと思った。「大阪府内の公立の政令指定都市以外の中学3年生の子ども」というところをもう少し書けば、よりはっきりするのではないかと思う。

それから27ページの一番上の端末の生徒への無償貸与について。無償貸与している自治体は、確か全国で30数%だったかと思う。大阪府として、非常に大きな予算をかけて子どもたちを支援しているという点をアピールしていただけたらいいと思う。

次に32ページの「1 全体を通しての考え方」の3つ目の・のところだが、外部資源の効率的に活用とあるが、できれば外部資源を効率的に活用するだけでなく、社会の人々と目標を共有して、ともに協力するといったニュアンスが出てくると、活用の「使う」というイメージだけでなく、一緒にやっていくという姿勢が感じられるようになるのではないかと思う。

37ページの3つめの・のキャリアパスポートの活用について、これは生徒一人ひとりが持つものであって、3年間のキャリア教育以降の取組みは学校組織として行うもの。そこは切り分けて記載して、例えば、最初に3年間のキャリア教育を「見える化」と書いて、そのあとにキャリアパスポートの指導をするというような書き方をされたいかがかと思う。

5つめの・の説明で、「大学等と連携して、生徒の進学に対する興味関心、モチベーションを高めていくことが重要である」とあるが、進学に対する興味関心だけでとどまるのはもったいない書きぶりかと思う。様々な学問分野や研究に対する興味、あるいは研究・探究力を培うとともに、進学へのモチベーションを高めていくといったような書き方ではいかがか。

それから、38ページの1つめの○の・の4つめの3行目に「自己の個性を把握し」とあるが、これが学校を指しているのか、個々の生徒を指しているのか、どちらにも読めてしまうように思う。

同じページの指標○の2つめ、ICTのところの1つめの・で、「教員・生徒がお互いに関わりながら」とあり、確かにそのとおりではあるが、もし可能であれば、「全人的な関わり合い」といったような言い方もいいのではないかと思う。

39ページの6の1つめの○の・の1つめの2行目の、「スクールミッションやポリシーの策定、情報発信を行うことが重要である」という箇所。ここは、情報を発信するだけでなく、「関係者とも共有する」というニュアンスを出したらどうか。

同じ箇所の・4つめで、これは私が出席しなかったときの議論であったかと思うが、「教員の経歴や取り組みなど」というところで、なぜ「経歴」なのかと疑問に感じた。例えば教員の「個性」とか「願い」とかではないだろうか。ここは私が理解不足かもしれないが、初めて読む人はなぜ経歴と思う人がいるかもしれない。

それから同じページの2つめの○「府民に対する広報」の2行目で、「効果的に活用をして広報する」とあるが、ここも「広報し理解を得る」とか「協力を得る」といったニュアンスがあるといいのでは。

40ページ、40ページの○学校業務組織の改善等の1行目、「学校業務・組織に対する教員の満足度が学校運営の充実・活性化につながり」とあるが、学校は教育をするところであるので、学校運営の前に「教育活動と」と入れていただくと、よりの確かと思う。

最後に、42ページの「おわりに」の3つめの段落の4行目で「より良い社会の創り手」と記載いただき感謝。可能であれば、「より良い社会の創り手」の前に「自らの幸せな人生と」と入れていただき、子ども個人の幸せへの願いも含めていただくといいかと思う。

浅野会長：

欠席の2名委員からの事務局に意見等が届いていれば、紹介をお願いします。

教育総務企画課参事：

まず、池田委員からは特にご意見をいただけていない。本日の審議を見ていただいた後に、改めてご意見があるかと思う。

金澤委員からは2点意見をいただいている。

まず、13ページの脚注15について、要保護児童対策地域協議会の説明だが、事務局でまとめた内容に加えて、法的な観点からどのような定義がされている組織なのかということについて、改めて記載するべきではないかというご意見をいただいた。後ほど、また先生と調整をし、文言修正を行う予定。

それから、33ページで、生徒の多様性への対応の4つめの・で、子どもの権利条約に関する箇所。従前、先生からご指摘いただいた内容を踏まえて記載しているが、もう少しわかりやすい内容にすること

と、権利に関する教育という点をもう少し出していくべきではないかというご意見があった。このまま読むと意味が通りにくいということであった。こちらについても、先生と調整のうえ、文言修正をさせていただく。

沼守委員：

まず、1 ページ目については、2 段落目の最後に、「知的障がいのある児童生徒等の教育環境に関する基本方針等に基づく」とあるが、このあとに説明が出てきていないと思う。令和 2 年度に作成されたものと認識しているが、どこかに少し説明があればわかりやすいと思う。ほかにもたくさん取り組み内容が書かれているので、これについても注釈があってもいいのではないか。この文章の最後のところで、「教育環境の確保を推進してきた」とあるが、一般的には「確保を図る」「努める」という文言が多いので、「推進」で意味があれば推進でもいいが、一般的な文言とは違うという印象がある。

次に 4 ページで、図 2 と図 3 の間の 4 行で、「H23 年度選抜」「H26 年選抜」といった言葉が入っているが、全体の卒業生数の話で、「選抜」という言葉が必要だろうか。削除した方が正しい文言になるかと思うので、検討をお願いする。

次に、7 ページの 2 段落目の 2 行め、「先駆的な取り組みである高校生活支援カード」とあり、確かに先駆的な取り組みであるが、自分で褒めているような感じもある。私の認識では、この事業は 25 年にモデル実施をして、26 年から全ての府立学校で府が初めて一般的に取り入れたという経緯だと思うので、そのあたりを書いた方が、「先駆的」というよりも具体的な取り組み内容がわかってよいのではないか。

続いて、11 ページの (1) の①で、高校入学前の自己肯定感の状況というところで、令和 3 年度の全国学力・学習状況調査の結果が載っているが、他の表と比べると、この表が令和 3 年度だけに限定されている。府のホームページを見ても、調査の令和 3 年度結果については、28 年度の過去の経緯を含めた折れ線グラフで出ている。その方が、他の表との関係からするとわかりやすいのではないか。文言も、「高校入学前の自己肯定感の状況」とあるが、言いたいのは大阪の児童・生徒の自己肯定感の状況で、小学校中学校から引き続いて、自己肯定感の醸成に努めていくという話だと思う。入学前だけに限定しているように捉えられる懸念もあるので、表も経年変化も含めた形にするなど、検討してほしい。

18 ページの最後の 3 行の部分で、「概ね各学期に増大し」とあるが、上の表は 6 月 7 月 8 月の限定の表になっていて、各学期の数字が出ていない。通年、各学期間の通常業務において、先生がたの業務はいつもあって、ルーティンで増えているという意味だと思うが、表と文言だけを読んだときにわかりづらいと思う。

32 ページ以降の第 2 章について、全体的にそうならざるを得ないかなと思うが、文末が「〇〇すべき」となっている箇所が山ほど出てくる。ひとくりにしてしまっている感じも出るので、少しニュアンスが違うところは、この会議で話されたニュアンスをもって別の表現も検討してもらいたい。

34 ページの最初の・について、浅野会長からも話があった全日制の募集学級数の考え方のところだが、4 行目のところで「行っているところである」とあり、そのあと「この間の急激な少子化を踏まえ」となっている。ニュアンス的に全体の形がわかりにくいので、例えば「しかしながら」といった接続の言葉を入れてほしい。

37 ページの 4 の卒業後を見据えた進学・就職等の支援の 4 つめの・について、「現在、R3 年度入試より大学入学共通テストがスタートする」とあり、大学入試改革が進んでいることが、ここでさらっと出てくる

が、あまり他で大学改革の話が出てこない中で、大学入学共通テストの意義やなぜ変わったのかが、文章が注釈でもう少し書いた方がよいと思う。30 年間、センター試験が続いてきて、大きな目的は高校の中身と高大接続の意味合いであり、それを踏まえての文書だと思うが、それが読まれた方に分かるような形での文言にしていきたい。

39 ページで、先ほど田村委員から指摘のあった「教員の経歴」というのは、私が意見を申し上げたところだと思う。経歴というのは本人が今まで取り組んできた得意な内容とか、その先生の功績を意図して、そういうことを子どもたちが期待して学校へ来るということもあるので、PR できる内容は、どんどん載せていけばいいと思う。大学の先生方についてはきちんと実績を含めて経歴が載っているので、部活の実績や学級での挑戦、内容など何でもいいのだが、ここに行けばこういう先生がおられるということがわかるような内容を発信してほしいという趣旨。

最後に、その 1 つ前の「制服や修学旅行等の各種費用」とあって、確かに学校徴収金はあるが、この書き方は「制服や修学旅行等の各学校の特色ある行事内容」とか、あまり費用にこだわる必要はないのかなと思う。記載に少し違和感があったので、取っていただけたらありがたい。

小酒井委員：

まず、いろいろと私どもの意見も反映していただき非常にありがたく、非常に素晴らしいものができたと思う。改めてお礼申し上げます。

数点お話す中でまず 17 ページのところ、いろいろと注釈を入れていただき最近の動向等とかを解説いただけたので、かなりわかりやすくなった。ICT 関係に関して現在の状況とかのアンケートだが、内容を見るとやはり、教師中心の ICT の使い方以外のところで、個別最適化された学びといったものに ICT を使っているとか、あとは共同学習・共助学習といったようなところで ICT を活用しているかといった、学習者中心の教育をベースとした ICT の利活用といったようなものがつけ加わって、どうもそれに対応しきれてないといったことが向こうで見えてくるころではあるかなと思った。それに対応したところで、36 ページでは、課題研究とか、あるいは探求の話が出てきて、こういったところにもデジタルテクノロジーの積極的な利活用というコメントをいただき、ICT から見ると、整合性がつくような形で書かれてあるので、もうちょっとだけその対処として ICT を使っていることを方向性として書くと、その対処した感じにもっとなると思った。だから、17 ページのところの対処として、こういった使い方といったようなところで、デジタルテクノロジーを積極的に使っていくとその対策を打った感が出せると思った。それと同時に書いているのが、英語、国際、科学技術、教育、福祉などの大学の専門性というようなことではあったが、現実的に高校のところで、GLHS のものを普通科に展開しようとする、これまで以上に探求とか課題研究とかになってくるとシステムの要素や、理科的な教育もしっかりしていくことが、全方位的な教育をしていくのに大事だったりもするので、そういうことがあっていいと思った。これだけだと、科学技術という言葉でフワツとしているが、実際の高校の現場でやられている理科教育とか、技術であるとか、情報であるとか、そういったSTEM的な要素の科目の充実も視野に入れておくべきだと思うので、そういったことも検討いただければと思った。

38 ページに ICT だけくつたところがあって、今までの流れからいうと協働的な学習・協調的な学習ということに使ったり、あとは個別最適化された学びに ICT を使ったりしてくると、タブレットや PC の端末とい

たものを生徒が使うようになると思う。大阪でどういう機器選定されているかとか、各種使っているデバイスとかの関係があると、今後出てくると予想されるのが、ひょっとしたらもう出ているのかもしれないが、バッテリーがもたないという現象がすぐ出てくる。機種によってはすぐ起こりうる話かもしれないし、いつまでもずっとカタログスペック通りの電源消費ができるというわけでもなく、使えば使うほど、探求活動とかいろんな学びに使えば使うほど電池がなくなって、早く切れるということがあるので、例えばモバイル、そのPC等とかの端末に使えるモバイルバッテリー等を貸し出す体制作りだとか、あるいは電源でどこだったら充電できるといったような環境整備も一緒に想定しておかないといけない時が早晚来ると思う。そういったことも想定されると良いのかなど。その環境整備、PC、タブレットを使った学びといったものを支援する体制というのが、一番顕著に出るのがそういう電源等だったりもするので、そういったサポート等が何かしらあるとまた良いのかなというのが私の感想。以上。

黒田委員：

今まで私がいろいろ言ってきたことを、文章の中に入れていただきありがたい。少し言っただけでかなり一般的に広範囲に書き込んでくださったので、非常に感謝をしている。私から、4点コメントをさせていただく。

ページの最初の方から。先ほど沼守委員の方からもあったが、18ページの表8の「時間外在校時間」について、前回、私がこういう資料があれば入れていただきたいということで、入れていただいたのかなと思うが、やはり少しわかりにくい。この「時間外在校時間」の概念も、おそらく一般企業のように残業というような概念がないので、このような表現かと思うが、その状況がわからないと、余計にわからないし、下の解説文を沼守委員のおっしゃったようにわかりやすくする必要があったと思った。それが1点。

2点目は、32ページのところ。これまでに気づくべきだったが、もう1回最後なのでよく読み直して、感じたところだが、32ページの冒頭の部分の文章の上から3行目、真ん中あたりに、「一方で」という言葉がある。その「一方で」の前の部分が「成年年齢が満18歳以上へと引き下げられ」という部分があって、繋ぐ言葉に「一方で」があって、その後が「知的障がいや発達障がいのある生徒が増加するので、支援が必要だ」という書き方だが、私がネガティブな読み方をしてしまうからかもしれないが、「一方で」というと、並列で同じ内容を言うときもあるが、良い面もあれば悪い面もあるとか、何か対比するようなイメージがどうしてもついてしまい、「一方で」の前の部分が、割と肯定的な文章だというふうに捉えてしまえば、その「一方で」の後の「知的障がい発達や発達障がいのある生徒が増加する」ことが、やや増加して大変だというふうにとらえられないかという気がする。「ともに学び、ともに育つ」という方針の中で増加しており、これはどちらかというところと好ましい状況だと考えられる。これらを踏まえると、ポジティブなニュアンスで書いた方がいいと思うので、「一方で」というのを、「さらに」、「または」とか変えるだけでもいいので工夫をしていただけたらと思う。

次が、38ページ。上の方の5の特色ある魅力づくりに向けた教育基盤の底上げのタイトルも含めて、6行目、「各校の様々な取り組みや教育資源を全校で共有のうえ」ということで、何ヶ所かでこの教育資源という言葉が出てくる。なんとなく教育資源が何かということはわかって思えばわかるが、具体的にこの教育資源とは何かということ、例えば、教育方法や指導方法、地域との連携などの教育資源というような形で、具体的に教育資源のどこかに書いた方が、実際にこれを読んで何かするときにイメージが湧きやすいと思った。

4 点目が、これも同じ 38 ページ。あまりこれまで ICT のところについては、コメントしてこなかったが、最後によく読んでみたところ、38 ページの下から 6 行目、「ワープロや表計算をはじめとする基本的な P C の操作スキル」のところ、ワープロ・表計算は依然として大事だと思うが、このワープロ・表計算だけでは、既に時代に追いついていないと思った。でも、何が必要か考えたところ、やはりインターネットの活用だとか、もしくは動画とか映像で表現することが増えてきていると思う。別に、自己発信、データを整理するとかだけではなく、自分が何かを表現するとか、発信をする方の基本的な P C のスキルというのもあっていいと思った。大学の方で、学生を一般企業が募集しているビジネスコンテストとかいろんなものがある、どういう形態で応募するかというと、パワーポイントの資料とかでもいいが、動画でも可能というところが、最近増えてきている。自分たちが言いたいことを、動画でスマホとか、タブレットのカメラとかで撮って、表現をするということも、社会ではかなり行われていると思うし、最近取扱説明書も、QRコードを見れば、動画が流れるようになっていて、読むのが面倒くさい人が多いので、この動画で説明するという、作る技術が求められていると思う。また、就職活動とかで企業のホームページとかを見ても、昔は文章と写真ぐらいだったのが、最近は、もうほぼクリックすると先輩が喋っていることになってきているので、何かそういったものがあったら、読んだ学校の先生が参考にできると思った。専門ではないので、そういったことが実際高校でどう扱われているかわからないが、書き込めるようであれば、お願いできたらと思う。

小原委員：

よくまとめていただき、とても勉強になる資料となったと思う。

3 点あるが、まずは 16 ページの図 19 について、前に言ったところでもあるが、この解説図の図 19 の下に解説があり、教職員、保護者ともに上昇し、その差は減少する傾向とあるが、まず第 1 に、これが教職員の上昇と読むかどうかであるが、確かに平成 27 年まで増加しているが、その後は横ばいとなっている。なぜそれを言うかという、他の資料は「近年は横ばい」と書かれていて、この部分は上昇といっているの、気持ち悪いなと思った。それくらいだったらまだいいが、言いたいことは、この教職員と保護者の差が小さくなることではないような気がする。つまり、この差が小さくなる方がいいわけでも、差が小さくなることをめざしているわけでもないと思っていて、むしろ強調すべきは、保護者が上がってきているということが強調されるべきで、あえてその差が小さくなっているというよりは、保護者がこれを評価するようになっていて、つまり何だったかという、学校からの情報提供に対して、肯定的に評価している人が増えているわけである。2 章にも関わるが、保護者が求めている、評価していつている、だから、学校頑張りましょうということではないかと私は思う。こういう風に情報発信を一生懸命先生たちも学校もやってくださっていて、それを保護者がいいぞって思ってくれていることの方が強調されると思うので、差が僅差になってきているとか、先生の評価との差が小さくなっているという話ではないのではないかと考えたのが一点目。

二つ目は、18 ページ。先生方から上がっていた表 8 の平均時間のところについて。結局言いたかったのは、あまり時間が変わっていないということであったか。専門家ではないので、どのように表を見たらいいのかということだけの疑問であるが、夏休みに減少するのは悪くないし、夏休みに減少する傾向について働く時間があまり大きく変わっていないということか。2 章の 40 ページなどに書かれている、先生たちの過度な負担増にならず、先生たちのやりがいであったり、充実や改善というところに繋がるのであれば、「概ね、各

学期に増大し、夏休みなどの長期休業期間に減少する傾向がある」という言葉よりは、平均時間を見ると大きく変わっていないということ、教員の人数や年齢構成にもあまり左右されないということが書かれていて、そうであれば負担も減っていないわけなので、過度の負担にならないように、というところに繋がるのかなと思う。書きぶりだけではないかなと思う。2章の方に繋がりにくいかなと思う。

三つ目は、第2章の方に入った40ページ、41ページの統計的事実の把握のところであるが、現場の声や意見を調査で残す重要性を先生や教員や学校も認識しているというニュアンスが入るといいと思った。調査に行ったりすると、学校現場でいろんな意見があって、いろんな子どもたちがいて、先生もいろいろで、多くの方々が、そういった調査では何もわからない、実際の現場で声を聞かないと伝わらない、など言われるが、結局のところは言葉として残せば広く伝わるし、次の世代にも伝わると思う。いろんな人、いろんな子どもたちがいることも当然であるが、特徴や平均を捉えることは、政策を考える上では大事な側面があるので、先生方も含めて、言葉として残すことに重要性を認識した上で、この統計的事実の把握に繋がるというというのが、将来に向けての希望であり、ここに書いていただくということを強く求めるわけではない。最近の調査でいうと、負担と言われてしまうが、うまく活かすので、言葉としてぜひ残していただきたいという期待も込めて、意見として述べさせていただきます。以上。

山崎委員

まず拝見して、すごく感動した箇所を伝える。35ページに感謝されるという言葉があったと思うが、府立高校の目指すところが素晴らしい。一言ではあるが、私自身とても感動した。

今回の資料を拝見し、いくつか気づきがあったので、お伝えしたいと思う。まず、30ページの就職インターンシップの割合が低いという話で、次のページに、大学進学を希望される方にも影響するという話だったが、あくまでも就職を希望される方がインターンシップに行ったという割合であれば、そこまで低くならないのかなと感じたので、こちらでお伝えをしたい。

次に、37ページの3行目、「生徒一人ひとりの個性能力を最大限に発揮」というところと、40ページの二つ目・の2行目にあるブランディングやカテゴリズの検討ということで学校の魅力作りに繋げていくべきであるという話であるが、前回、教育長より卓越性のお話を改めていただいたかと思う。その際のメッセージでは、尖る学校ではなく、一人ひとりを伸ばしていく教育というお話をいただいたかと思う。2ページには、次に今後、教育庁として、大阪府立高校の目指すところで、卓越性とリンクするような記し方があっていいのかなと感じた。

38ページのICTのところについて、今までの審議会の中でどなたかの先生がおっしゃったかと思うが、情報がすごくあふれるので、その情報が正しいものなのか、その情報を取捨選択する力、そういう教育を学校に求めるということをおっしゃっていたかと思うので、その内容が今回どこかに記載があればいいかなと感じた。先ほど沼守委員がおっしゃった、39ページの費用について、いずれかのタイミングで私が少しお話したかもしれない。私学の授業の無償化がうたわれて、そちらに生徒数が流れるというようなお話も課題であったかと思う。授業は無償化になったとしても、例えば中学校のタイミングで修学旅行が海外旅行2週間で、何十万かかるとか、そういった話を差し上げた際に、例えば府立高校の取り組みとして、府からの援助等があった場合、在学中にプラスアルファで出す金額が見えてくる方がいいのではないかというお話を差し上げた

思う。その内容が、この加えての 1 文になったと思うので、その私学に入る無償化について学校がクローズアップされるかもしれないが、府立高校に在学するお金がないから、私学の修学旅行に行けないという選択や、もしかしたら家庭環境によつたらあるかもしれないけれども、府立だとこの公平性をうたっていると思うので、そのあたりがもう少し詳しく書かれてもいいのかもしれない。

最後に 40 ページにリンクするところをいくつか伝えたい。19 ページと 32 ページと 40 ページについて、19 ページの「スクールカウンセラーをすべての府立高校に配置し」、32 ページの「出口：卒業後をみすえた進学・就職の支援」のところで、40 ページの「○学校業務・組織の改善等にある、加えて、教職員の多忙化の一因を占める生徒指導や部活動に関する負担の軽減や支援の方策について、引き続き検討を行うべきである。」について、リンクしてお話をしたいと思う。この生活指導という表現がどこまでの範囲を示すのか、定かではないが、府立高校の常勤されている先生方に望むこととして、学びの提供だけではなく、人を育む時間を大切にさせていただきたいと考えている。お仕事においても言い換えることが出来るかもしれないが、IT や外部のリソースなどを活用して、効率的・合理的に出来る内容と人として向き合い、丁寧にやる内容と見極めが必要かと感じている。

こちらの一文を読んだ際、先生と生徒の関わる重要な部分を軽減と読み取れないか、このポイントがとても怖く感じた。1 人 1 人を大切に、自己肯定感を高めること、それは、生徒たちをひとまとめのグロスとして見るのではなく、1 人 1 人と向き合い、認める（先生や府立高校が）ことが重要になると考える。実際には、先生方は尽力され、生徒たちの為に時間を捻出し、育む時間を取っておられるかと思うが、この一文のみが抜き出されることがあれば、本来、この素晴らしい組織づくりを本気でされている大阪府教育庁の姿勢が疑われてしまうような気がしてしまった。

小田会長代理：

細かなところについてご検討いただきたいと思いますところをお話させていただきたいと思う。まず、22 ページにある図 25 の説明にある、「知的障がい等のある児童生徒は、依然として増加傾向にあり、相談回数の減少等背景には、相談をする側の課題認識や相談体制の不十分さがあると考えられる。」とあるが、不十分さがあると考えられる、で終わるのでなく、「不十分さがあり、充実が必要である」とか、「不十分さがあると考えられるため、充実が求められる」といった表現や、23 ページの「不十分さがあると考えられる」についても、さらなる充実といった表現にすると次に繋がると思った。

次に、32 ページであるが、一番上の段落にある、合理的配慮が注釈として一番下に書いていただいているが、元々、合理的配慮というのは、障害者の権利に関する条約の時に初めて出たと思っているが、この文章であれば、障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律、いわゆる障害者差別解消法の方がいいと思うので、ご検討いただけたらと思う。それと、合理的配慮や支援の重要性なのか、支援の必要性なのかに関しては、私もこの方がいいということではないが、ご検討いただきたい。

33 ページの 2 の生徒のニーズに添えていく就学機会の確保にある、・3 つ目の「生徒の進路選択にあたっては中学校における進路指導が何よりも重要であり、高校や支援学校における支援の仕組みや内容などを理解できるよう」にあるが、高校や支援学校における教育の内容や支援の仕組みを理解できるようとし、教育内容を入れていただくことが、進路指導には大事なことかなと思っている。

最後に、33 ページにも、・の二つ目に、共通推進教室の成果やここに入っているからなのかと思うが、34 ページの 3 生徒の状況に応じた学習・支援機能の充実の一番最初の・であるが、「知的障がいのある生徒の学びや支援等がより充実したものとなるよう、自立支援コースにおける取組みの成果を踏まえ」とある成果は、自立支援コース及び共生推進教室の取組みの成果を踏まえということは、先に入れているからここはないのか、様々な事情はあると思うが、成果という意味では、この成果を踏まえて次の展開があるのかなと思うので、ここはご検討いただけたらと思う。以上。

教育総務企画課参事：

事務局から 1 点、小酒井委員から ICT のバッテリーの件についてご意見頂いたが、無償貸与による 1 人 1 台端末については、5 年のリース契約となっており、その間、タブレットのバッテリーについて、経年劣化等が発生した場合には、保守対応で交換し、リース期間中は、日中の使用時間が一定確保できるようにしている。

浅野会長：

皆さんから、ご意見、ご提案、あるいはご感想などを頂いたが、こちらで確認し、教育庁と成案化し皆さんにお渡したい。この後の修正等については、私と事務局にご一任頂くことで良いか。（異議なし）

申し上げたように、事務局と調整しながら、成案化に向けて進めていきたい。それでは、成案化の取り扱いについて、事務局から説明頂きたい。

教育総務企画課参事：

ご尽力いただきお礼する。会長一任ということで、今後のスケジュールについて説明する。本審議会が最終となり、本日以降、ご意見等があれば、年末までに事務局にご連絡をお願いしたい。その後、本日のご意見等を踏まえ、修正をしていく。年明けに、会長と事務局において、最終の文言調製を行い、1 月中旬を目途に、答申を成案化のうえ、会長から教育長に手交頂く予定。修正状況を改めて報告するとともに、手交の日時等が決まれば、改めて事務局から委員に連絡する。以上。

浅野会長：

私から一言挨拶する。今、事務局からご説明していただいたように、本審議に係る追加のご意見については、年末までにご連絡いただければ。したがって、以上をもって、本年の 1 月に立ち上がった本審議会の、今後の高校のあり方等に関する審議は一旦ここで終了する。委員の皆さんには、大阪府が掲げる公平性、卓越性、多様性の観点から、忌憚のない、あるいは闊達なご審議を頂き、また専門領域に基づいたいろんなご提案を頂いた。改めて感謝する。また、新型コロナ禍の影響により、フルリモートで開催もした。これまでにない形での審議もあったが、皆様のご協力のもと、円滑に審議が行われたことを重ねてお礼申し上げる。本議会には、ゲストスピーチの方にもヒアリングをおこなった。その方々にも、この場を借りてお礼を申し上げたい。事務局においては、本答申の内容を十分に踏まえて、短期的に解決すべき課題、中長期的に解決すべき課題を見据え、大胆に取り組みが進められることを大いに期待したいところ。